

## 生きる力を育むESD実践カリキュラムの開発に関する研究（最終報告）

国立教育政策研究所の「学校におけるESDに関する研究」の最終まとめで提案された「ESDの視点を生かした授業づくり」の視点表による教科や領域等の単元へのESDの視点導入やESDカレンダーによる総合的な学習の時間を中心とした年間計画の作成により、学校におけるESDの視点の円滑な導入を目指した。ESDの視点をカリキュラムに導入することにより、学校全体が活性化され、児童生徒の学びが深まる上に、新たな学びに対する意欲も向上することが確認された。

<検索用キーワード> ESD 持続発展教育 生きる力 環境教育  
ESDカレンダー 総合的な学習の時間 教科横断 カリキュラム

### 共同研究者

環境省中部環境パートナーシップオフィス チーフプロデューサー 新海 洋子（平成22, 23, 24年度）

### 研究会委員

あま市立甚目寺小学校教諭

佐美 茂（平成23, 24年度）

東浦町立緒川小学校教諭

原 伊津子（平成23, 24年度）

一宮市立葉栗中学校教諭

宇佐美 徹（平成24年度）

岡崎市立新香山中学校教諭

山内 貴弘（平成23, 24年度）

県立愛知商業高等学校教諭

梶原 英彦（平成24年度）

県立刈谷高等学校教諭

渡邊 芳隆（平成24年度）

県立豊田東高等学校教諭

小瀧 逸子（平成23, 24年度）

総合教育センター研究部長（現県立一宮南高等学校 校長）井中 宏史（平成22, 23年度）

総合教育センター経営研究室長 山口 明則（平成22, 23, 24年度）

総合教育センター研究指導主事（現豊川市立小坂井東小学校 教諭）坂田 貴仙（平成22年度）

総合教育センター研究指導主事 佐々木佐知子（平成22, 23, 24年度）

総合教育センター研究指導主事 佐治 宏昭（平成23, 24年度）

総合教育センター教科研究室長 櫛田 敏宏（平成22, 23, 24年度主務者）

## 1 はじめに

ESD（Education for Sustainable Development：持続発展教育《「持続可能な開発のための教育」とも呼ぶ》）は、持続可能な社会を主体的に担う人づくりとして、2002年の国連持続可能な開発に関する世界首脳会議（ヨハネスブルグサミット）で、「国連持続可能な開発のための教育の10年」（2005年開始）が提唱され、国際的に広まってきた活動である。我が国では、2006年にESD関係省庁連絡会議でESD国内実施計画が策定され、2008年に出された教育振興基本計画で重要な理念の一つとして位置付けられ、新学習指導要領（小・中学校2008年、高等学校2009年公示）にも持続可能な社会構築の観点が盛り込まれた。

文部科学省からは、ユネスコスクールを推進拠点として学校にESDを広めようという方針が出され、各県にユネスコスクールに関する窓口が設定され、徐々に登録校が増えている。また、国立教育

政策研究所においても学校におけるE S Dについて実践研究がなされ、報告書が出された。

このように、E S Dが学校に広まる流れはできてきたが、まだ多くの学校に浸透しているとは言い難い。その要因としては、E S Dの概念の分かりにくさや授業やカリキュラムへの導入の難しさ、多忙な学校に新たな教育課題を持ち込むことへの抵抗感などがあると考えられる。そこで、本研究では、E S Dを理解する分かりやすい考え方や、E S Dの授業やカリキュラムへの導入方法を解明し、提案することとする。その際、特定の個人に仕事が集中することなく、学校全体でE S Dに取り組める方法を開発するように留意した。

## 2 研究の経過

当センターでは、平成20年度よりE S Dの学校教育の導入について、E S Dの実践に実績のある環境省中部環境パートナーシップオフィス（E P O中部）と連携して研究を進めている。

平成20、21年度は、「環境教育の在り方に関する研究—持続可能な社会構築を目指して—」を行った。実態調査の結果、大部分の児童生徒は、将来の環境について憂慮し、自らも何か行動しなければならないと考えていることが判明した。その実態を踏まえて実践研究を行った結果、工夫をすれば、各教科の学習にE S Dの視点を取り入れることが可能であることや、各実践後の評価から、E S Dの視点を取り入れることで児童生徒が新たな学びに向けて意欲を高めるなどの効果が大きいことも分かった。1)

この研究では、各教科の学習にE S Dの視点を取り入れることを目標に行ったが、E S Dは総合的な学びであり、学校全体で取り組むことが重要ではないかということで、平成22、23年度と「生きる力をはぐくむE S D実践カリキュラムの開発に関する研究」を行った。平成20、21年度の研究成果を基に、学校レベルにおいて、E S Dの視点を取り入れた生きる力を育む実践カリキュラムを開発、検証した。この研究では、E S Dカレンダーやチェックシート型アプローチの利用により、各学校の現行のカリキュラムにE S Dの視点を取り入れることが可能であることが分かった。また、E S Dで求められる力は学習指導要領の目指す「生きる力」と大きく重なり、実践によって児童生徒の学びが深まり、次の学びに向けて意欲を高めるなどの効果が大きいことも分かった。2) 以上のような4年間の成果を基に、平成24年度の研究を進めていく。

## 3 研究の目的

学校におけるE S Dの円滑な導入方法を明確にする。そのために、E S Dの概念を明確にし、E S Dの授業や単元への導入、そしてカリキュラムへの導入方法を、実践を通して研究・開発する。最終的には、負担を最小限にした形で、学校全体でE S Dに取り組む方法をまとめ、その成果を普及させる。

## 4 研究の方法

総合的な学習の時間や環境教育などの実践において実績がある学校と協働して、E S Dの視点を取り入れたカリキュラムを開発し、実践を行い、その有効性を検証する。カリキュラムの開発や実践に当たっては、環境省中部環境パートナーシップオフィス（E P O中部）と連携して進めていく。文部科学省の「E S Dの目標、基本的な考え方、はぐくみたい力、学び方・教え方」3)や国立教育政策研究所の「学校におけるE S Dに関する研究」4)、5)に合致した実践とし、成果を広く発信する。

## 5 研究の内容

### (1) ESDの概念の明確化

#### ア ESDとは

ESDの概念は、1980年の世界環境保全戦略で初めて取り上げられたが、2002年のヨハネスブルグサミットで日本政府とNGOが共同提案した「国連ESDの10年」(2005年から2014年)の決定で、世界中に知られるようになった。

従来型の開発は、物質的な豊かさをもたらす一方で、環境破壊、食料問題、人権侵害など多くの問題を生み出している。世界中の人々、将来世代の人々が、安心して生活できる社会にするためには、自然、経済を含む社会や人間性をバランスよく維持するなど、持続不可能な状況を克服する行動が必要になってくる。そのためには、さまざまな課題と自分とのつながりに気づき、行動できる意欲と能力、価値観、解決のために多くの人と協働する力などを育てることが重要である。そのための教育がESDである。

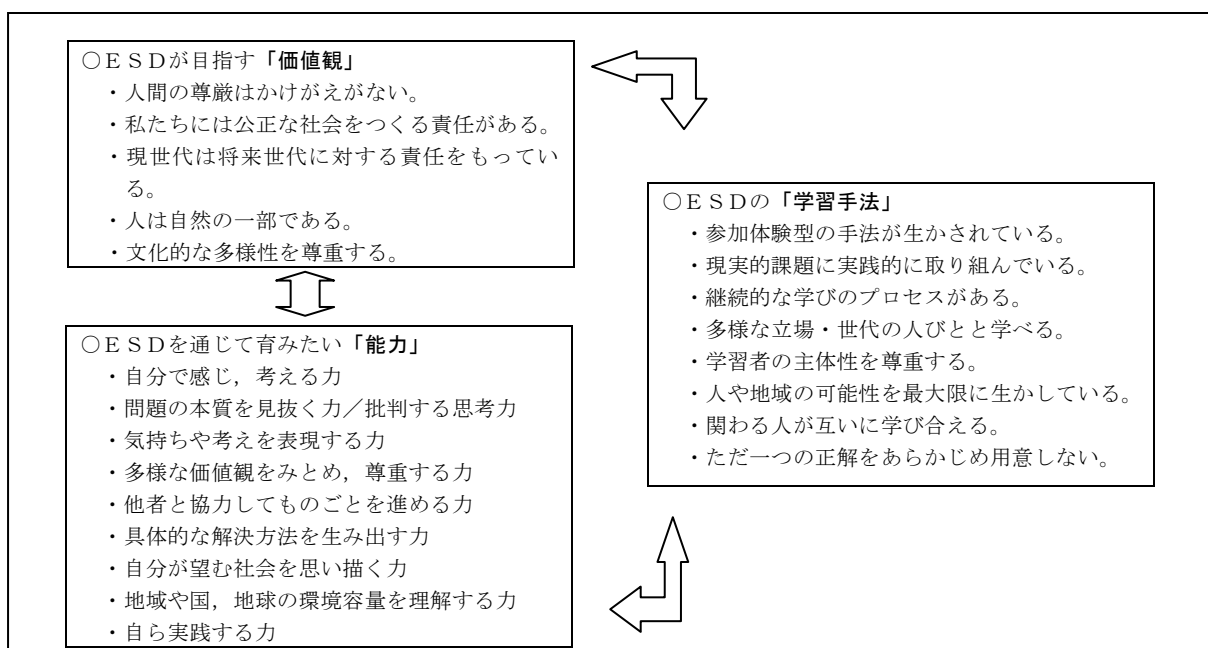
文部科学省は、ESDの目標として次の3点を挙げている。3)

- ・持続可能な発展のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれること。
- ・すべての人が質の高い教育の恩恵を享受すること。
- ・環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような価値観と行動の変革をもたらすこと。

#### イ ESDの特徴

学校教育をはじめ、社会教育、企業教育などで、環境教育、多文化共生教育、ジェンダー教育、人権教育など、いろいろな社会問題に対する教育が行われている。これらは、すべてESDに関わる。どれも掘り下げると、育みたい力は、多面的なものの見方や問題解決能力、コミュニケーション能力であり、学習手法としては参加体験型、ワークショップ型、価値観としては共生や人間の尊厳がエッセンスとして表れる。これらが、ESDが目指す育みたい力や価値観である(図1参照)。

図1 ESDが目指す「価値観」、育みたい「能力」、学習手法」



「未来をつくる『人』を育てよう」NPO法人 持続可能な開発のための教育の10年推進会議 (ESD-J) 編 6)より

また、「E S D入門」(2012)では、E S Dについて次のように説明している。

「従来の環境教育や人権教育、多文化共生教育では、近年、相互に複雑に関連するようになってきた地球的諸課題を解決することができなくなり、相互に乗り入れをすることが必要になってきたという背景もある。環境問題を解決し、その発生を未然に防止することを目的に環境教育が始められ、基本的人権を守り、育てるために人権教育があるなど地球的課題教育はそれぞれに生まれた経緯や存在理由がある。そして、これらの教育が扱う問題は、全てが持続可能性に関わる問題であり、持続可能な社会を創造していくためには解決しなければならない問題である。とすれば、従来からのアプローチのみでなく、持続可能な社会構築といった視点から、他の教育課題と連携しながらアプローチをしていくことは極めて有効であると考えられる。例えば、従来の環境教育は、人と自然との関係を改善していくことが目的であり、人権教育は人と人、人と社会との関係を改善していくことが目的であった。これをトータル(統合的かつ総合的)に見ていこうというのがE S Dと言える」(一部改) 7)

## (2) E S Dを学校全体に広める手だて

### ア E S Dを学校全体で取り組むことの重要性

学校におけるE S Dは、人とのつながりや、実際の課題解決やそれに向けた行動という面を重視するならば、外部の人材・機関等と連携しやすい総合的な学習の時間への導入が適していると考えられる。また、総合的な学習の時間と各授業を関連させて展開すれば、更に学びが深まる。しかし、そのような授業展開をするためには、教科担当一人で行うことは難しい。学校全体でE S Dの視点を踏まえたカリキュラムを導入することが望まれる。

成田(2008)は、「教科・領域などの限界・境界を越えて、同僚・保護者・地域・専門機関などとの連携・協働がE S Dには必要である」8)と教科を越えた連携・協働の重要性を述べ、更に学校全体がE S Dに取り組み、その実践を持続・継承させることが重要であることを示している。成田(2009)また、及川(2011)は、「E S Dの学習活動の「量」よりも「質」を高め、「体系的・系統的」に全校体制で発達段階に応じた長期的な視野で指導していくことがE S Dには重要である」9), 10) と示している。

このように、学校全体で、持続的にE S Dに取り組むことの重要性がE S Dの研究者や実践者によって語られている。では、カリキュラムにE S Dの視点を取り入れるには、どのような手法があるだろうか。我々は、次の二つの手法に着目した。

### (ア) E S Dの視点を生かした授業づくり

国立教育政策研究所では、E S Dに関して平成20年から研究準備を始め、平成21年度から23年度にかけて、「学校における持続可能な発展のための教育(E S D)に関する研究」を行っている。昨年度、本研究では、その中間報告書4)に掲載されているチェックシート型アプローチによって、実践にE S Dの視点を取り入れる試みを行った。平成24年3月には国立教育政策研究所から研究最終報告書5)が出され、今年度、本研究ではその中で提案されている「E S Dの視点を生かした授業づくり」も参考にして実践を進めた。

この最終報告書ではE S Dの視点に立った学習指導の目標を次のように設定している。

指導目標:「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」ことを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う。

そして、そのための「持続可能な社会づくりの構成概念」(p. 9 資料1・表1)と、「E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」(p. 10 資料1・表2)、「E S Dの視点に立った学習指導を進める上での留意事項」(p. 11 資料1・表3)が提示されている。また、E S Dの視点を生かした授業が、そうでない授業とどう違うのかということや、E S Dの視点を生かす際に配慮すべきことなど

について整理するために、指導者は、視点表（p.12 資料1・表4）を作成するとよい。

この、国立教育政策研究所がまとめた「ESDの視点を生かした授業づくり」の手法を用いると、各教科や領域等の単元案や授業指導案にESDの視点を取り入れやすい。

(イ) ESDカレンダー（学年毎のESD内容に関する各教科・領域の関連図）

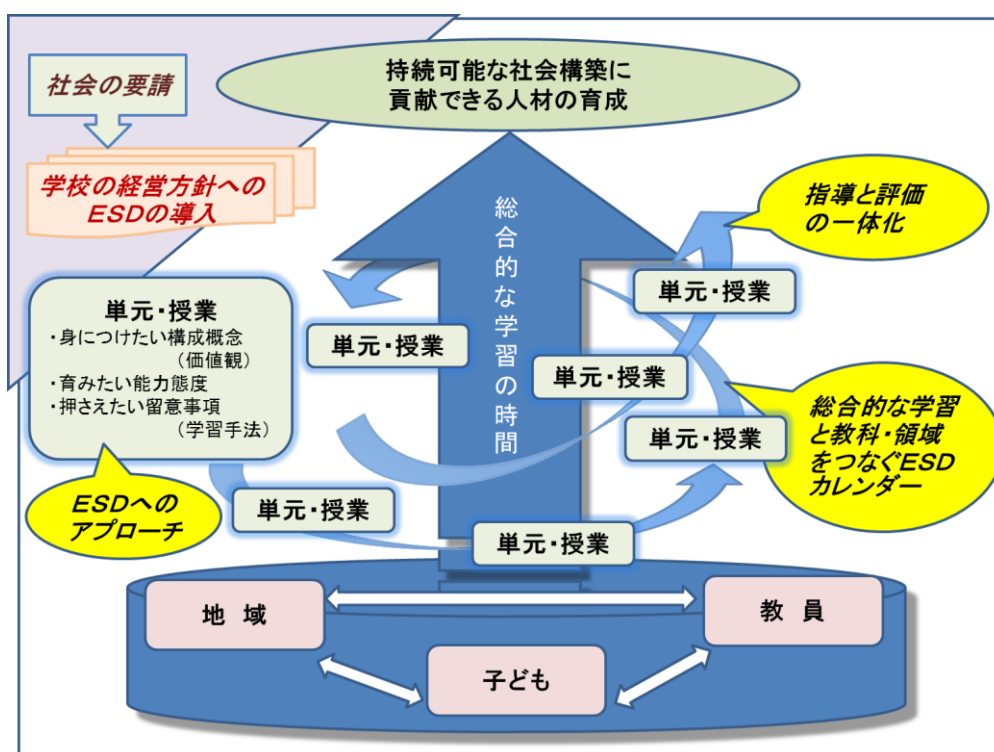
手島（2007，2011）が提唱した手法で、学年毎に、一年間の教育の中で、各教科，総合的な学習の時間，特別活動等がどのように結びついているのか，カレンダーに項目を立てて，その関連を分かりやすく結んだものである。学校教育全体でESDを進めていくためには，このような関連付けが重要と考え，考案された手法である。11) 更に手島は，単元のねらいや，問題解決的・探究的な学習過程に沿った学習活動や，地域人材・関係機関との連携などの情報を入れた指導計画として進化させていくことが求められていると述べている。12) 我々の実践についても，一部ESDカレンダーを導入して年間計画を考案した。

今回，カリキュラムや実践にESDの視点を取り入れる手法として，「ESDの視点を生かした授業づくり」と「ESDカレンダーの作成」を各研究協力委員が行った。

イ 学校におけるESDの在り方

項目アでも述べたように，ESDを学校に取り入れるには，ESDの理念から言って，総合的な学習時間を軸とした教科横断型のカリキュラムを作ることが重要である。文部科学省ユネスコ国内委員会では，ESD推進拠点（ユネスコスクール）の大切なポイントとして，「ESDを通じて育てたい資質や能力を明確にし，自分で，あるいは協働して，問題を見出し，解決を図っていく学習の過程を重視した教育課程を編成するよう努めること」「総合的な学習の時間を中心とした教科横断的な指導計画を立てるなど，指導内容を適切に定め，さらに，指導方法の工夫改善に努めること」を挙げている。13) これは，ユネスコスクールだけでなく，ESDを学校として進めていく上で大切な視点である。教育課程にESDの視点を取り込むならば，やはり学校の経営方針にもESDの視点を入れていくべきである。これらをまとめたものが図2である。

図2 学校におけるESD構想図



また、重要なポイントとして、E S Dは一から始めるのではなく、既にあるそれぞれの学校の教育活動にE S Dの視点を入れていくということである。統一性のなかった、教科、総合的な学習の時間、特別活動などをE S Dという視点を入れることによって、「つなぐ」ことができる。この具体的な例は、実践例を見ていただきたい。さらに、E S Dでは「つなぐ」が重要なキーワードである。教科、領域等を「つなぐ」だけでなく、学校（教員、子ども）と地域、外部団体を「つなぐ」ことも重要であり、学校でE S Dを展開する場合、そのつながりは、活動の土台となってくる。

#### ウ E S Dの評価

評価については、単元・授業の評価とカリキュラム全体の評価がある。

単元・授業の評価は、現在の教科、総合的な学習の時間で行われている、目標に基づく評価規準の作成、評価という流れで行うことが妥当であろう。紹介する各学校の実践の中でも行われているので、参考にしていきたい。パフォーマンス評価を取り入れた学校もある。カリキュラム全体の評価は、今後の研究課題であるが、児童・生徒、保護者アンケートや学校評議員などの意見を基に総合的に評価することが重要と思われる。

#### (3) 各学校における実践概要

研究協力委員（小学校2名、中学校2名、高等学校3名）所属校において、カリキュラムにE S Dの視点を取り入れる実践を行った。

研究協力委員による実践は以下のとおりである。①から④の4校は、平成22年度からの実践校であり、昨年度から実践研究を継続している。また、⑤から⑦の3校は、今年度からの実践校である。

	概 略
①あま市立甚目寺小学校	ふるさと 甚目寺ー「かかわる、つたえる、つながる」学習や活動を重視するE S Dの取組ー総合学習「ふるさと甚目寺」の学習に、「持続可能な社会づくりの構成概念」と「E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」を取り入れ、教材を内容的・空間的・時間的につなげること、人や地域をつなげること、身に付けた能力・態度を行動につなげることを大切にしたい取組を実践し、検証した。
②東浦町立緒川小学校	個性化教育とE S Dー総合学習「生きる」をE S Dの視点で見直し、学校ぐるみで取り組むー総合学習「生きる」をE S Dの視点で見直し、体験活動だけでなく探究的な学習になるように改善を進めた。その方針に沿って、各学年で単元開発や授業づくりを行った。今回は、6年生の国際理解と自国文化の理解について学習する単元「国際人になろう」にアートマイルプロジェクトを取り入れ、探究的な学びに改善した事例を中心に紹介する。
③岡崎市立新香山中学校	環境を見つめ、考え、働きかける生徒の育成ー環境学習を基盤としたE S Dの展開ー既に導入されている「岡崎環境学習プログラム」にE S Dの視点を導入し、生徒が持続可能な社会をイメージし、自分の生き方を高めることを目指した。今回は、中学校2、3年生「持続可能な社会づくりのための共生を考えよう」の取組を中心として、E S D新香山プランを開発し、E S Dの視点を取り入れた探究的な学びを完成させた事例を紹介する。
④愛知県立豊田東高等学校	総合学科の特色を生かしたE S Dの取組ー生徒が夢を実現するためにー3年間の学びの体系づくりである、『夢の実現』に向けてのキャリアガイダンス

	ス」「3年間の学びの流れ」についてESDの視点に立って整理し、見直しを行った。特色である「プラン別学習」や「総合発表会」「環境教育」「国際理解教育」「地域連携教育」などの取組がどのような能力や態度に結び付いているのか、国立教育政策研究所が示した視点表を用いて検証した。
⑤一宮市立葉栗中学校	<b>伝統行事を見つめ、地域を考える生徒の育成ー祝い餅づくりを通したESDの取組ー</b> 地域を巻き込んだ伝統的な行事である「祝い餅づくり」に、ESDの視点を取り入れ、その目的や意義、卒業生や地域の人々の願いなどを生徒に伝え、地域や地域の良さを見つめ直す学習の場として捉え直すことによって、地域社会の良さを考える生徒の育成を目指した。
⑥愛知県立愛知商業高等学校	<b>高等学校における地域をフィールドとした実践的マーケティング活動の展開ーESDの視点で見直したミツバチプロジェクトの取組ー</b> 「課題研究」にESDの視点を入れることにより、取組を一層充実させ、生徒が自ら考え、行動し、解決していく態度と考え方を涵養 <sup>かんよう</sup> することを目指した。今回は、マーケティング研究「ミツバチプロジェクト」を実践として取り上げ、ESDの視点で整理し、改善を図った。
⑦愛知県立刈谷高等学校	<b>問題・課題解決能力を育むESDの実践ー総合的な学習の時間のESD化を通してー</b> 国際社会に貢献できる科学的リテラシーや国際的教養やコミュニケーション能力を備えた人材育成を目指してSSH事業を進めている。その特色として、総合的な学習の時間を「ESD」とし、現在世の中が抱えている課題・問題を発見し、その解決に向けて主体的に考えて考察することができる生徒の育成を目指した。

全ての学校において、ESDの視点をカリキュラムに取り入れることを意識して実践を進めることができた。今回の実践は、各研究協力委員だけで進めたものではなく、管理職をはじめ、学校全体で取り組んだ。多くの教員をつないで新しい実践を行うことは大変に難しいが、既にある枠組みにESDの視点を取り入れることは、工夫をすれば可能であることを示すことができた。

各校の実践について、どのような工夫で、どのようにESDの視点がカリキュラムに導入され、何が変わったかをまとめた表が p. 12, 13 の資料 2 である。

## 6 研究のまとめと今後の課題

深刻な環境問題や社会問題により持続が困難ではと考えられる現在の状況では、持続可能な社会へ構造を変えようと「行動する人」の存在が重要である。自然との共生や多様な立場が尊重できる価値観を備え、柔軟な問題解決能力をもち、よりよい社会づくりに協働できる人材の育成が望まれている。この人材の育成を担うのがESDである。

学校へESDの導入は、人とのつながりや、実際の課題解決やそれに向けた協働という面を重視するならば、先行研究や先行実践にもあるように、やはり地域と連携した生活科や総合的な学習の時間への導入が最も適していると考えられる。このことは、今回の7校の実践からも明らかになった。

また、今回は、特別支援学校による実践を行うことができなかったが、学校におけるESDで重視される「地域との共生、つながり」という概念は、共生社会を目指す特別支援教育においても重要な柱である。愛知県内でも、特別支援学校によるユネスコスクールへの申請が始まった。今後、特別支援学校においても積極的にESDの視点を取り入れたカリキュラム開発が期待される。

子どもたちの未来には、難題が山積している。それらの難題に協働して立ち向かう「生きる力」を子どもたちに身に付けさせることは、大人の大きな責務である。今後、各学校におけるE S Dの更なる実践が強く望まれる。

#### ※参考文献

- 1) 「環境教育の在り方に関する研究－持続可能な社会構築を目指して－」愛知県総合教育センター研究紀要第99集 2010.3
- 2) 「生きる力をはぐくむE S D実践カリキュラム開発に関する研究」愛知県総合教育センター研究紀要第101集 2012.3
- 3) 「持続発展教育」文部科学省ユネスコ国内委員会 <http://www.mext.go.jp/unesco/004/004.htm>
- 4) 「学校における持続可能な発展のための教育（E S D）に関する研究 中間報告」国立教育政策研究所 2010.9
- 5) 「学校における持続可能な発展のための教育（E S D）に関する研究 最終報告書」国立教育政策研究所 2012.3
- 6) 「未来をつくる『人』を育てよう」 持続可能な開発のための教育の10年推進会議（ESD-J）編 2006.12
- 7) 「持続可能な開発のための教育 E S D入門」阿部治・朝岡幸彦監修 筑波書房 2012.8.17
- 8) 「持続可能な開発のための教育（E S D）カリキュラムの開発の方法」成田喜一郎 環境教育学研究第17号 2008
- 9) 「E S D教材活用ガイド」 財団法人ユネスコ・アジア文化センター編 2009.3.19
- 10) 「学校におけるE S Dの推進とその展開事例」及川幸彦 季刊環境研究No.163 2011.9
- 11) 「E S Dカレンダー（学年毎のE S D内容に関する各教科・領域の関連図）公開について」手島利夫 <http://aspnetwork.exblog.jp/5347152/>
- 12) 「N e w ! E S Dカレンダーのすすめ」手島利夫 江東区立八名川小学校 2011.6.3, 教育新聞 2011.6.23
- 13) 「ユネスコスクールガイドラインについて」文部科学省ユネスコ国内委員会 <http://www.mext.go.jp/unesco/004/1326014.htm> 2012.8.12



## 資料 1

指導目標、表 1～4 国立教育政策研究所「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔最終報告書〕」より抜粋（一部改）

指導目標：「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」ことを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う。

表 1 「持続可能な社会づくり」の構成概念（例）

人を取り巻く環境（自然・文化・社会・経済など）に関する概念	I 多様性 いろいろある <b>【多様】</b>	自然・文化・社会・経済は、起源・性質・状態などが異なる多種多様な事物（ものごと）から成り立ち、それらの中では多種多様な現象（出来事）が起きていること。 ※多様性を尊重し、事物・現象を多面的に見たり考えたりすることが大切である。
	II 相互性 関わり合っている <b>【相互】</b>	自然・文化・社会・経済は、互いに働き掛け合い、それらの中では物質やエネルギーが移動・循環したり、情報が伝達・流通したりしていること。 ※人は様々なシステムとつながりを持ち、更にもその中で人と人が関わり合っていることを認識することが大切である。
	III 有限性 限りがある <b>【有限】</b>	自然・文化・社会・経済は、有限の環境要因や資源（物質やエネルギー）に支えられながら、不可逆的に変化していること。 ※有限の資源を将来世代のために有効に使用していくことが求められ、有限の資源に支えられている社会の発展には限界があることを認識することが大切である。
人（集団・地域・社会・国など）の意志や行動に関する概念	IV 公平性 一人一人大切に <b>【公平】</b>	持続可能な社会は、基本的な権利の保障や自然等からの恩恵の享受などが、地域や世代をわたって公平・公正・平等であることを基盤にしていること。 ※人権や生命が尊重され、他者を犠牲にすることなく、権利の保障や恩恵の享受が公平であることが必要であり、これらは地域や国を超え、世代をわたって保持されることが大切である。
	V 連携性 力を合わせて <b>【連携】</b>	持続可能な社会は、多様な主体が状況や相互関係などに応じて順応・調和し、互いに連携・協力することにより構築されること。 ※意見の異なる場合や利害が対立する場合などにおいても、その状況にしたがって順応したり、寛容な態度で調和を図ったりしながら、互いに協力して問題を解決していくことが大切である。
	VI 責任性 責任をもって <b>【責任】</b>	持続可能な社会は、多様な主体が将来像に対する責任あるビジョンをもち、それに向かって変容・変革することにより構築されること。 ※現状を合理的・客観的に把握した上で意思決定し、望ましい将来像に対する責任あるビジョンをもつことが大切である。

表2 ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度（例）

<p>① 批判的に考える力 《批判》</p>	<p>合理的、客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き、物事を思慮深く、建設的、協調的、代替的に思考・判断する力。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他者の意見や情報を、よく検討・理解して取り入れる。</li> <li>・積極的・発展的に、よりよい解決策を考える。</li> </ul>
<p>② 未来像を予測して計画を立てる力 《未来》</p>	<p>過去や現在に基づき、あるべき未来像（ビジョン）を予想・予測・期待し、それを他者と共有しながら、物事を計画する力。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・見通しや目的意識をもって計画を立てる。</li> <li>・他者がどのように受け取るかを想像しながら計画を立てる。</li> </ul>
<p>③ 多面的、総合的に考える力 《多面》</p>	<p>人・もの・こと・社会・自然などのつながり・関わり・広がり（システム）を理解し、それらを多面的、総合的に考える力。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・廃棄物も見方によっては資源になると捉えることができる。</li> <li>・様々な物事を関連付けて考える。</li> </ul>
<p>④ コミュニケーションを行う力 《伝達》</p>	<p>自分の気持ちや考えを伝えるとともに、他者の気持ちや考えを尊重し、積極的にコミュニケーションを行う力。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考えをまとめて簡潔に伝えられる。</li> <li>・自分の考えに、他者の意見を取り入れる。</li> </ul>
<p>⑤ 他者と協力する態度 《協力》</p>	<p>他者の立場に立ち、他者の考えや行動に共感するとともに、他者と協力・協同して物事を進めようとする態度。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・相手の立場を考えて行動する。</li> <li>・仲間を励ましながらチームで活躍する。</li> </ul>
<p>⑥ つながりを尊重する態度 《関連》</p>	<p>人・もの・こと・社会・自然などと自分のつながり・関わりに関心を持ち、それらを尊重し大切にしようとする態度。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が様々な物事とつながっていることに関心をもつ。</li> <li>・いろいろなもののお陰で自分がいることを実感する。</li> </ul>
<p>⑦ 進んで参加する態度 《参加》</p>	<p>集団や社会における自分の発言や行動に責任をもち、自分の役割を踏まえた上で、物事に自主的・主体的に参加しようとする態度。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の言ったことに責任をもち、約束を守る。</li> <li>・進んで他者のために行動する。</li> </ul>

表3 ESDの視点に立った学習指導を進める上での留意事項

<p>(1) 教材のつながり</p>	<p>教材や教科等の内容的な「つながり」、教室・学校と地域・社会・国・世界との空間的な「つながり」、過去・現在・未来といった時間的な「つながり」などを図りながら学習を進めていくことが必要である。</p> <p>取り上げた「構成概念」が、前後の学年においてどのような系統性や連続性があるのか（カリキュラム上の縦の「つながり」）や、その「構成概念」が、他教科等においてどのように扱われているのか（カリキュラム上の横の「つながり」）などを明らかにする。</p>
<p>(2) 人のつながり</p>	<p>児童生徒同士の「つながり」を取り入れた参加体験型の学習を展開したり、地域（身近な地域だけでなく、国内や国外、とりわけ発展途上国も含めて）との「つながり」を図りながら、多様な立場や世代の人々との「つながり」が体験できる場を用意したり、さらには、発達の段階に応じて、将来世代や過去世代との「つながり」も想像させたりするなどの工夫をしていくことが必要である。</p> <p>該当単元において、どのような人との「つながり」が学習活動として用意されているかを明らかにする。</p>
<p>(3) 能力・態度のつながり</p>	<p>各学校・地域の実情や児童生徒の実態に応じた課題を取り上げて、教科等における学習と活動との「つながり」や学校と家庭・地域社会との「つながり」を図りながら、継続的・実践的な「つながり」をもった指導を推進したり、現実的な問題解決との「つながり」になるように取り組んだりするなどの工夫をすることが必要である。</p> <p>他の教科等での育成はどうなっているのか（例えば、ある教科と他の教科との「つながり」、教科と総合的な学習の時間との「つながり」など）や育成した能力・態度が、どのように生活や地域で活用できるか（例えば、学校での学習と実社会・実生活との「つながり」）などを明らかにする。</p>

表1、表2、表3で示された「構成概念」、「重視する能力・態度」、「留意事項」を基に以下のように単元の展開を考えていく。

- ① 単元の目標や内容・教材等を表1「構成概念」に基づいて、どのように捉えるか、また、単元の授業展開を通して、児童生徒にどのような表2「能力・態度」を育成したいかを考える。また、表3「留意事項（3つのつながり）」に基づいて、留意すべきことや、力点を置きたいことを考える。
- ② 単元の総括目標、四つの観点ごとの評価規準、主な学習活動・内容と教師の指導の概要、本時の目標展開などを考えるが、学習指導案では、表1「構成概念」や表2「能力・態度」と関連が深いところを明らかにする（太字体や斜字体で示したり、表中の【多様】、《批判》などの略号を使ったりすると分かりやすい）。
- ③ ESDの視点を生かした授業が、そうでない授業とどう違うのかということや、ESDの視点を生かす際に配慮すべきことなどについて整理するために、視点表（表4）を作成するとよい。

表4 ESDの視点表による整理

単元名「○○○」 学習内容「◇◇◇◇」														
持続可能な社会づくりの構成概念							ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度							
I 多 様 性	II 相 互 性	III 有 限 性	IV 公 平 性	V 連 携 性	VI 責 任 性	VII 創 造 性	① 批 判 的 に 考 え る 力	② 計 未 画 来 を 像 立 を て 予 る 測 力 し て	③ 考 多 え 面 的 的 力 ・ 総 合 的 に	④ ン コ を ミ 行 ユ ウ ニ カ ケ ー シ ョ	⑤ 度 他 者 と 協 力 す る 態	⑥ る つ 態 な 度 が り を 尊 重 す	⑦ 度 進 ん で 参 加 す る 態	⑧ 自 己 制 御 能 力
【多様】 ☆	【相互】	【有限】 ○	【公平】	【連携】	【責任】	【創造】 ○	《批判》 ○	《未来》 ○	《多面》	《伝達》	《協力》	《関連》	《参加》 ○	《制御》

※表中の☆印，○印について：☆印は，元々学習指導要領にあるもので，○印は実践で追加したもの（ESDの視点として取り入れたもの）。このように授業改善の前後で印を付け，比較すると分かりやすい。

※表中の構成概念や能力・態度の要素については，学校の実態に合わせて付け加えたり，減らしたりしても良い。

## 資料2 各校の実践内容とその効果（変容）

学校名	実践内容	効果（変容）
甚目寺小学校	<p><b>ふるさと 甚目寺</b>  <b>ー「かかわる、つたえる、つながる」学習や活動を重視するESDの取組ー</b></p> <p>①学校教育全体をESDの視点に立った活動になるように、昨年度のESD活動テーマをさらに見直す。</p> <p>②各学年のキーワード、1・2年「地域」、3年「福祉」、4年「環境」、5年「産業」、6年「歴史・文化」に基づいた活動テーマと学習・活動内容を決定する。</p> <p>③ESDカレンダーを教材の内容的・空間的・時間的につなげることをさらに意識し、各学年の児童の実態に応じたものをつくっていく。また、昨年度つくっていたESD関連指導計画と年間指導計画を一つに合わせ、新年間指導計画をつくる。新年間指導計画には重視する能力・態度の評価規準を入れる。</p> <p>④昨年度までの4つの育みたい力から重視する7つの能力・態度の変更に伴い、総合学習（ふるさと甚目寺）の評価規準の作成とESDの取組を学校全体・各学年で評価できるアンケートを作成し、実施する。</p>	<p>・「かかわる」とは、児童や学校が一方的に地域や地域の人と関わったり、関わってもらっている状態であり、「つたえる」とは、関わりから児童が学んだこと、学校が知らせたいことを地域や地域の人に伝えたり、情報発信したりすることである。そして、「つながる」とは「かかわる」や「つたえる」ことにより、一方的でない双方向的な関係ができることである。</p> <p>・年間指導計画とESD関連指導計画を1本化し、さらに重視する能力・態度の観点と評価規準を含めた新しい年間指導計画をつくった。ESDカレンダーを補完するものとして、これからも十分活用できるものになった。</p> <p>・事前アンケートを実施した結果、ふるさと甚目寺をすばらしい町、よい町だと思い、大切にしていきたいと思っている子どもが多い一方、何か考えたり、行動したりしたいと思う子どもが比較的少ないという、本校の子どもの実態が分かった。重視する能力・態度で学校全体として特に育みたい力を「進んで参加する態度」とした。</p>
緒川小学校	<p><b>個性化教育とESD</b>  <b>ー総合学習「生きる」をESDの視点で見直し、学校ぐるみで取り組むー</b></p> <p>①これまでの総合学習「生きる」の各活動を「自然とのつながり」「社会とのつながり」「人とのつながり」の3つに整理する。</p> <p>②ESDの視点で見直し、よりESDの方向性と合致するように学習活動を改善する。</p> <p>③よりESDの方向性と合致するように、関連する教科等の学習内容をカリキュラム上に位置付ける。</p> <p>④それぞれの活動に関わるESDの視点を書き加え、ESDカレンダーとする。</p>	<p>・ESDの実践を積み重ねることによって、授業や単元にESDの視点を導入する方法が分かってきた。昨年度実践した学年の事例を参考に、今年度は全学年でESDを取り入れた授業を行うことができ、学びが変わり、子どもが変わっていく姿をいくつも見る事ができた。</p> <p>・1年生の単元「おおきなあれ わたしのはな」では、意図的に一鉢にいっつかの種をまいて複数の苗が育つ状況をつくり、ある程度育った段階で「間引きをするか」という正答の定まらない問いを投げかけ、話し合わせた。子どもたちは自分なりに考え、「かわいそうだから間引きはしない」「大きな花を咲かせるために間引きをする」「間引きした苗は捨てるのではなく花壇に植える」といった意見を述べた。ESDの可能性の広がりを感じた。</p>
新香山中学校	<p><b>環境を見つめ、考え、働きかける生徒の育成ー環境学習を基盤としたESDの展開ー</b></p> <p>①地域教材を開発する。岡崎環境学習プログラムを基盤として、新香山の地域教材を取り入れたカリキュラムの創造をする。</p> <p>② <u>探究学習での教師支援の在り方を工夫する</u>。関わり合いの授業における「教師の仕掛けと支援」の在り方の実践的検証をする。</p> <p>③ 『ESD新香山プラン』を取り入れる。ESD新香山プランを開発し、授業に取り入れる。</p>	<p>・環境学習そしてESDのキーワードは「探究」であることが実感できた。さらに、学びが深まるにつれて「世代を超えた倫理観」を学ぶ道徳的な授業の必要性が高まってきた。この実践を通して、学びのキーワードを「つながり」とした。さらに今後は、生徒の行動化のキーワードを「つづける」としていきたい。</p> <p>・新香山プランでは、ESDの視点、能力・態度、留意点を関係付け、具体的な手だてとして表現し、活用することができた。</p> <p>・生徒たちは世代を超えた人々との公平感や平等感を深めることができた。未来社会の姿が少しずつ見えてきたのだろう。そして、未来をつくるのは自分たちの行動次第なのだとその責任を実感することができたのではないかと考える。</p>

学校名	実践内容	効果（変容）
豊田東高等学校	<p><b>総合学科の特色を生かしたESDの取組－生徒が夢を実現するために－</b>  3年間の学びの体系づくりである、『夢の実現』に向けてのキャリアガイダンス「3年間の学びの流れ」についてESDの視点に立って整理し、見直しを行う。  具体的には、1年生の科目選択、地域環境研究、2年生の異文化研究、異文化理解、修学旅行アンケート、3年生の中間報告会などを改善した。</p>	<p>見直した内容をESDの視点表で評価したところ、「構成概念」においても「重視する能力・態度」においても本校が目指す方向に沿っていることが分かった。これまでキャリア教育を中心に取り組んできた「産業社会と人間」、「総合的な学習の時間」は、新学習指導要領の柱である『生きる力』につながっており、ESDの理念にも通じる。今回の研究を通して、一つ一つの学習活動がESDにつながっていることを確信することができた。諸活動を通して生徒が身に付ける力、それはものの見方や考え方、積極性、コミュニケーション能力などであるが、これまで生徒が記したレポートや講演会後の感想などから、3年間にわたる学習の中で生徒たちの身に付いていることは明らかである。</p>
葉栗中学校	<p><b>伝統行事を見つめ、地域を考える生徒の育成－祝い餅づくりを通したESDの取組－</b>  地域を巻き込んだ伝統的な行事である「祝い餅づくり」を、田植えや餅つきなどの活動面を重視するだけでなく、ESDの視点を取り入れ、その目的や意義、卒業生や地域の人々の願いなどを生徒に伝え、地域や地域の良さを見つめ直す学習の場として捉え直すことによって、地域社会の良さを考える生徒の育成を目指した。</p>	<p>行事としての体験活動であった「祝い餅づくり」に、ESDの視点を取り入れることにより、様々な要素が絡み合い、地域理解の学習へとつながっていった。生徒は、調べさせたり、考えさせたりする活動を通して、地域のことに興味をもち、新たな発見をすることができた。体験を軸としたESDの展開については、地域社会に関する多くのテーマを設定することが可能であり、地域を理解し、再発見するのにたいへん有効であった。</p>
愛知商業高等学校	<p><b>高等学校における地域をフィールドとした実践的マーケティング活動の展開－ESDの視点で見直したミツバチプロジェクトの取組－</b>  ESDは、様々な地域に暮らす様々な立場の人々によって、地域をはじめあらゆる場面で展開されるものであり、総合的に学び、実践することが大切である。本講座では、「環境」「経済」「社会」といった多面的な視点から問題を追究し、その問題に対して自ら学び、考え、具体的な行動を実践する商業を学ぶ生徒を育て、さらには様々な主体との協力によって、「環境」「経済」「社会」のバランスがとれた持続可能な社会の構築に貢献できる生徒を育成することを目指した。</p>	<p>現在の取組にESDの視点を少しでも取り入れることで新しい展開ができることや学びの深さに違いが出るのが分かった。また、ESDには基本的な考えとして、物事を総合的に見ることが大切であり、経済的な側面、社会的な側面、環境的な側面をバラバラに実行してもうまくいかず、三つを総合的に見ていくことが重要であることを学んだ。</p>
刈谷高等学校	<p><b>問題・課題解決能力を育むESDの実践－総合的な学習の時間のESD化を通して－</b>  現在世の中が抱えている課題・問題を発見し、その解決に向けて主体的に考えて考察することができる生徒を育むことを目標に、ESDの視点を踏まえて総合的な学習の時間の計画を立案した。  具体的には、現場での実体験を生徒にさせ、そこから学習意欲や興味・関心、問題意識や新たな課題の発見をさせる試みをした。生徒に問題意識を喚起したり、価値観を揺さぶったりするような講演や実験・体験の機会を提供することで、課題を解決できないかと考えた。</p>	<p>概して良く調べ、良くまとめられた課題研究を行うことができた。ただし、情報活用に関してはインターネットによる情報検索が多く、情報リテラシーや研究におけるソースの扱い方も指導しなければいけない。また「課題探究力」において、評価規準を超える生徒が増えるような指導やカリキュラムの開発にも取り組む必要がある。</p>